

日本記者クラブ会報

第 473 号
2009 年
(平成 21 年)
7 月 10 日発行

〒一〇〇〇〇〇〇一
東京都千代田区内幸町二ノ二ノ一
日本プレスセンタービル
© 社団法人 日本記者クラブ
<http://www.jnpc.or.jp>

6 月 20 日午後 4 時 15 分

水上健也元理事長が急逝

己が名利を捨て、隣人と社会に尽くし、積恩に報わんとす。

これこそが新聞人・水上健也さんの立ち位置だったのだと知った。年末、手帳を新しく買うたびに、最初

まさか、十日後にこんなことになるとは。

日本記者クラブの新理事長として、水上さんを挨拶に訪れたのは 6 月 11 日。日本記者クラブの中興の祖だった水上さん。直接お会いするのは初めてのことだ。

読売新聞社の議長室に入ると、執務机から離れ、穏やかな表情で迎え入れてくれた。

話が最近の新聞界を取り巻く経営環境に及ぶと、水上さんは笑みをたたえながらこう語った。「まあ、新聞社が豊かになったのはここ数十年のこと。新聞社はもともと、どこも貧乏でした。右往左往することはな

のページにまず大きく「正確 迅速 平明 良識 穏便 公平」と書き、そのあと冒頭の文章をしたためたという。最後に「読売新聞の信条」として①責任ある自由②人間主義③国

いですよ」
日本で新聞の存在感が一気に高まったのは自由民権運動のころ。米国で新聞が影響力を持ち始めたのはジエファースンの独立運動の時代。当然そのころ新聞社はみんな貧しかった、と解説する。

新聞人として最も楽しかった思い出は？と話を向けると「そうですね。編集局長時代にワシントンでリーグにインタビューし、そのあとすぐパリでミッターランと会ったところですかね」と嬉しそう。

どこまでも、ジャーナリストだった水上さん。ありがとうございました。

理事長 斎藤 史郎

際主義④公正な報道⑤責任ある言論と続けた。

これが何十年も変わらない習慣だったと、富士子夫人が告別式(6・24)の見事な挨拶の中で明かした。

葬儀での「お別れの言葉」は、読売テレビの土井共成さんと日本テレビの氏家齊一郎さん(久保伸太郎さん代読)だった。土井さんはロンドン時代以来の家族ぐるみのお付き合いで、水上さんの静謐、含蓄、そして優しいほほえみを語った。氏家さんは「江戸っ子・健ちゃん竹を割ったようなまっすぐな気性で人情深かった」と故人を活写した。

水上さんは、クラブの中興の祖というべき存在だった。

理事長として 90 年の総選挙で初めての党首討論会を実現した。サポートしたのは主に藤村邦苗副理事長と平野裕企画委員長だった。そのあと大幅会費改定(91・4)を、犬養康彦副理事長、太田哲夫総務委員長、松山幸雄資格委員長、深川誠会報委員長らの協力を得て実施。それによって 10 階ホールをクラブ専用記者会

見場(92・4)にし、宿願を果たした。

水上さんは 30 年史に、「クラブへ行く心がやすらぐ」という一文を寄せている。そのなかで日本記者クラブの理事長を務めたことを、こんなふうにいっている。これは私の新聞記者としての人生にとって最高の名誉だったと思っています、と。理事長退任後も変わらぬ愛情をクラブに注いでいただいた。

6 月 4 日、定例の会合でおみえになった水上さんにアラスカの小部屋で、後継の中井新事務局長を紹介したのが最後になった。あのときも「よろしく頼みますヨ」と例のにこやかな笑顔をみせてくださった。

感謝と敬意をこめて、読売の死亡記事から略歴部分を左に掲げ、クラブとしての半旗とする。

▼みずかみ・けんや氏 東京外国語大学卒業後、1947 年読売新聞社に入社。ロンドン、パリ特派員を経て、69 年に外報部長、82 年編集局長、90 年に副社長。92 年 12 月から大阪本社の社長や会長を務め、2002 年 7 月の読売新聞グループ再編に伴って、グループ本社代表取締役会長、04 年に同経営戦略会議議長に就任した。89 年から 3 年 8 か月間、日本記者クラブの理事長を務めた。

(岩崎玄道)

ことの本質が見える人

杉田 亮毅

モノ静かな話しぶりの中に、鋭い観察が込められている—というのが、水上健也さんの印象だ。あまり表に立ちたがらない方だったので、各社の若い記者の皆さんが、直接、お目にかかる機会は少なかつたかもしれないが現役時代は、仏語、英語の巧みな語学を武器に、欧州をメーン舞台に大活躍された国際記者の先達である。

私自身は、日本記者クラブ理事長を拝命した前後ぐらいから、特に声をかけていただくようになった。新聞界に水上さんを敬愛する人は多い。水上さんのお話を直接、聞きたい—という人も数多くいる。日頃のぎを削っている新聞界にあって、これは珍しい。

近年は、毎日の北村正任さん、朝日の神塚明弘さんを中心に行われていた「水上さんを囲む会」に私も入れてもらって、「四社会」の名称で、三カ月一度くらいの頻度でお目にかかれた。悔やまれるのは、最後の会合になった六月の会合に私が都合で出席できなかったことである。東京ドームでの野球チケットを戴いたお便りが「ラストメッセージ」になってしまった。四社会では、国際政治、経済、そして国

内政治、経済など、幅広いトピックスをめぐって水上さんのコメントをお伺いするのが、私達の楽しみだった。コメントを聞きながら、「この方はこの本質が見えているな」というのが強い印象だ。

時には、難しくなった新聞経営も話題になった。特定の新聞社のワクを超えた発想と洞察の持てる方であった。それが私達を惹きつけた。そして、読売新聞社社葬での水上夫人の挨拶をきいて、その理由が分かった。「己が名利を捨て、隣人と社会に尽くし、積恩に報わんとす」の信条を持つておられたのだ。読売新聞社一社のみならず、全新聞界の「良心」を失ったような気持ちである。

(第12代理事長 日本経済新聞社 代表取締役会長)



食昼統領愚泰盧の韓国で行われた戒厳態勢中(1990.5.26)で務めた司會

飲みが効いた最後のワイン

北村 正任

二十五年前のことだ。欧州の特派員だった私は、読売新聞のベテラン記者がワインを注ぎ合いながら熱っぽく語るのを聞いた。

「うちの水上という先輩はすばらしい。僕はあの人のいうことならなんでも聞く」

水上健也という名前をどこかで見たことはあった。だが心に残る名前になったのは、この時からである。

お付き合いが深くなったのは、2003年以降。日本記者

クラブの先輩理事長として、多くを教えていただいた。国政選挙前の党首討論会を最初にやった時のリーダーシップなどは感動的である。このクラブの存在意義を、水上さんが先頭に立って世に示した感がある。

時折、食事を共にしながら見る水上さんは、二十五年前に私がイメージ

した人柄とほとんど違いがなかった。穏やかな口ぶりから、信念と誠実さが伝わってくる。とりわけ話が国際問題に及んだとき、個々の国民、民族の心情を踏まえた分析や感想に、強い説得力があった。このようなことを「見識」と言うのだろうか。

倒れる二週間前にプレスセンターのアラスカで三人の会食があった。いつものように、ワイン・リストを手にした水上さんは「今日は〇〇だから、X Xにしよう」と小声で独りごとを言いながら、高級な赤を指定した。どんな銘柄なのか私には分らなかったが、コクと飲みが効いていた。選んだご本人は口を少し付けただけで、二人がたっぷり頂戴した。

このときの話題も国際、政治、社会、文化、スポーツと幅広く、水上さんの関心は衰えを見せなかった。最後まで新聞記者だったのだなあと、今に思ふ。

水上さん、ありがとうございました。安らかに眠ってください。

(第13代理事長 毎日新聞社会長)

水上さんは呆気ないくらい、潔く逝った。いかにも我々が敬愛する健ちゃんらしい最期だった。

自宅で間近に見た温顔は、いまにも語りかけてくるようだったが、深い目尻のシワが目立つ。八十三歳の国際ジャーナリストの生涯、決して平坦ではなかったのだと、胸が詰まった。

二十歳そこそこで激動中の読売新聞記者になった水上さん、一癖あるベテラン記者たちに伍して、肩をいからせ、けんか早かった。草野球チームに後輩を集め、各社対抗戦で負けると怒ったが、実は底抜けに優しくかった。

仕事への情熱は半端でなかった。「三十歳くらいで海外特派員としてパリ、ロンドンに行つて痛感した。これからニュースソースをつくり、向こうに友人をつくらなければ」と(読売新聞四万号記念特集)。

外報部長、編集局長、編集主幹と上がるにつれ、海外ネットワークは広がり、高級大衆紙は現実のものとなつていく。

今日の韓流ブームなど影も形もなかった二十五年前、作家の司馬遼太郎氏を中心に、日韓知識人の座談会を

やった。

「そんなものやったら読売の部数が激減しますよ」と韓国側は笑い、司馬さんも「読売は本当に勇気があるな」と呟いた。水上局長は平然とゴーサインを出し、連載は二年にわたり三十三回、朝刊紙面を飾った。時代への先見性、信じたら

トコトン追求する、男・健ちゃんの真骨頂だった。これはほんの一例にすぎない。渡辺恒雄主筆との「ナベちゃん、健ちゃん」のタグマツチは、読売の今日を創った。

晩年の水上氏は「優れたナンバー2」の立場を堅持し、バランス役を徹した。私はその彼に中国の周恩来の姿をダブらせている。

(元企画委員 読売新聞出身)

信じたらトコトン追求する

阿部 義正



350人が多数も来賓など大使や各国要人や政財官界要人など出席した創立20周年パーティーで犬養(左)藤村の両副理事長と(1989.11.1)

水上さんが理事長だったときだ。現在の記者クラブが当然のように甘受している、二つの大きな「権利」を残すことに尽力してくれた。

一つが総選挙のときの各党党首討論会だった。記者クラブの歩みなどを読めば書いてあるので、触れないが、最初は1990年

2月総選挙のときからだった。

水上さんあて文書で、各党から公平かつ公正に運営できるのは日本記者クラブだけなので、ぜひクラブに主催してもらいたいということで行き受けたのだった。

開催できる場所

所は10階ホールだけだが、その使用権もなく、さらに機材もノウハウも何もない手探りで始まった討論会だった。

奇病に苦しむ水上さんが何日もクラブに通い詰めるなど、苦労したが何とか

成功させることができた。

せっかく成功させた果実がこれ一回で終わってはならぬと各党に「これを機に今後国政選挙などの場合、このような党首討論会を当クラブで実施してもらいたい」と文書で渡した。連綿と二十年に渡り続いている討論会はこれが始まりだった。

大きなクラブ行事で必要な10階ホールの専用使用権も一朝一夕で確保できたものではなかった。プレスセンタービルが貸し出し権を持っていた、初の討論会のときには一年も前から民放連のイベントに貸し出されていた。すったもんだしたが、民放連の中川順会長に譲歩してもらいやっと確保できた。ゴルフバチョフ・ソ連大統領の記者会見など大型の会見が目白押しだったころだ。

何とかして10階の専用使用権が欲しいと水上さんに頼んだ。会費値上げにはみみっちい事務局案をちらりと見て、一挙3割増という会費の増額を決めてくれたおかげで確保できた。私が知る理事長のうちでは、三指のうちに入る名理事長だった。

(元専務理事)

二つの「権利」獲得へ英断

白木 東洋

きたがわ せいいち
北川 誠一 東北大学大学院
国際文化研究科教授

6・3(水)ユーラシア研究会「アルメニア」
司会 宮田謙一委員 出席 43人

▼アルメニア 民族の歴史を再構築

アルメニアが日本記者クラブで研究テーマになったのは初めてではないだろうか。北川教授は「ノアの方舟伝説」の謎解きで、まず遠い小国を身近に引き寄せ、ディアスポラ(民族離散)やジェノサイド(大量虐殺)の運命を背負った民族の歴史を巧みに再構築してみせた。

首都エレバンから望むアララト山はノアの方舟がたどり着いたとされる神聖な山だが、10世紀頃まではいくつかの別名で呼ばれ「アララト山」とは見なされていなかったという。中世の伝説を引用しつつ「アララト山」へ歴史的な転換に至った道筋を読み解く。ノアの子孫を自負するアルメニア人の系譜も興味深い。

初めてキリスト教を国教とした背景や商人として世界を渡り歩いた経緯も叙述された。「放浪のアルメニア商人」



「ア商人」について特に興味を引いたのは、最初のアル

メニア人の職業が軍人であり、キャラバン(隊商)に転化していったとの説だ。「キャラバンでは武力と商人は切っても切れない関係にある」と指摘、示唆に富む軍人起源説を展開した。

北川教授が配布したアルメニアの地図には、1919年に第一次世界大戦終結のために開かれたパリ講和会議でアルメニア側が主張した「自国領土」が点線で示されている。現在の小さな国土に比べ、10倍ほどの広さがあるのか。ジェノサイド論争を抱えるトルコの東部やアゼルバイジャンとの紛争地域のナゴルノカラバフも含まれる。両国に挟まれ、激しい摩擦を抱えてきた厳しい地域情勢が見て取れる。

5年ほど前、エレバンを訪れ、ジェノサイドの犠牲者を悼む記念碑や博物館を見て回った。アルメニアでは今年に入り、トルコとの国交回復に向けた大きな一歩が踏み出された。この影響を受けナゴルノカラバフ問題も動き出す気配が出ている。アルメニアの歴史を見つめ直す良い機会になった。

日本経済新聞国際部 石川 陽平

G・L・ピールス
スリランカ輸出開発・国際貿易相

6・3(水)記者会見 司会 中井 康朗委員 通訳 澄田美都子 出席 36人

▼国際社会の懸念に反論

反政府武装勢力

「タミル・イーラム解放のトラ」(LTTE)と政府軍との25年以上に及んだ内戦が5月、終結した。ピールス輸出開発・国際貿易相は27万人に上る避難民のキャンプからの早期



帰還が最優先課題とし「経済活動を復活させ、(避難民が帰還先で)生活できるようにしないといけない」と述べた。

ピールス氏は観光や貿易での各国の経済支援を要請。戦闘が激しかった北部では、特に漁業の潜在力があるとした上で、日本からの経済支援に強い期待感を示した。6カ月以内の地方選実施も明言した。

多数派シンハラ人と少数派タミル人による民族対立が残した傷は深く、和解と融和には時間がかかりそうだが、現地からの報道によれば、両民族とも内戦終結を歓迎しているという。これまで食糧や避難民のテ

ントなどを援助してきた日本が、積極的に関与していけば、和解と融和の手助けとなるだろう。

しかし、ピールス氏は会見で、こうした内戦終結後の青写真よりも、国際社会の「誤解」を解くことに力を入れた。スリランカ政府が最終局面での死傷者数を公表せず、政府軍の無差別攻撃に対する懸念が、国際社会で

くすぶっていることへの反論だ。

ピールス氏はLTTEが民間人を入間の盾にしたため「政府は民間人の安全を第一に考えた」とし、勝利だけを考えた攻撃は控えたと説明。民間人の死傷者数の調査や政府の戦争犯罪追及という考えに「法的、道徳的な根拠はない」と抗議した。

ピールス氏も会見で死者数の公表を拒否したが、経済支援を求めるなら、国際社会の呼びかけに柔軟に応じる姿勢も必要だろう。スリランカ政府が意固地になればなるほど、復興が遅れ、市民にさらなる負担を強いることにもなりかねない。

共同通信外信部 和田 真人

ミゲル・ルイスカバーニヤス 駐日メキシコ大使

6・5（金）記者会見 司会 坂東賢治委員
通訳 三好勝駐日メキシコ大使館翻訳官
出席 44人

▼危機乗り越え前進したい

メキシコは新型インフルエンザでこの日までに5717人が感染し106人が死亡した。感染拡大のスピードが落ち着いた段階で行われた会見。大使は「メキシコ政府が情報の透明性確保に最大限尽くし、各国、



関係機関と連携したのが、世界での感染拡大阻止に役立った」と繰り返し述べた。

し強調した。事態を前向きにとらえて未来に生かそうとする姿勢が印象に残った。

記者の関心は、なぜ世界の中でメキシコで最も感染が拡大し、なぜ多くの死亡者が出たのかに集まった。大使は「科学的に証明されていないが」と前置きしたうえで、①風邪や通常のインフルエンザが流行する冬に発生し、症状も似ていたことから混同する人が多かった②メキシコ人は医者に行かず病気を治そうと

する傾向が強い—などの点を挙げた。貧困層で特に感染が拡大したのではないかと問う際には、感染死者の37・7%が肥満や糖尿病患者などだったというデータで反証した。

慎重に言葉を選びながらも、会見の端々で、日本を含め各国が取った渡航自粛政策などで観光業が打撃を受けたことへの懸念も感じられた。「（各国に）正当性に欠けると主張したが、理解されつつある」と表現し「外添要一厚労相とコルドバ保健相ら政府高官同士が緊密に連絡をし、日本政府はすばやく渡航警戒緩和の措置を取った」と謝辞で結んだ。発生源がメキシコ以外の国である可能性については、「メキシコでの発生以前に存在したという調査結果が出つつあるが、特定の国名を出すのは避けたい」とおそらく米国を念頭に置きながらも、言葉を濁した。

今年の日墨交流400周年にあたり、大使は会見で、両国で開かれるさまざまなイベント企画も紹介した。インフルエンザの危機を乗り越え、早く前に進みたいという強い意志を感じた。

毎日新聞外信部

宮川 裕章

志位 和夫 日本共産党委員長

6・10（水）昼食会 司会 藤延直道理事
川村晃司委員 出席 94人

▼蟹工船ブームで躍進できるか

書記局長時代をあわせ10回目の登壇だそうだが、いつにも増して自信に満ちた気分だったのではないかと。言うまでもない。「蟹工船」ブー

ムもあって、共産党への関心が大きく高まっているからである。

非正規労働者の問題では、日本経団連やトヨタの幹部と会談し、社会的責任を果たすよう求めたことを紹介。オバマ米大統領に核兵器廃絶演説を歓迎する書簡を出し、返書が来た経緯も詳しく語った。

「財界・大企業との関係でも、米」との関係でも、私たちが政権を担う党へと成長していくうえで、初歩的だが重要な一歩を踏み出した。いつまでも野党でいる気はない、そのためには共産党の皮を一枚ずつ



むいていきたい——。そんな決意表明のようにも聞こえた。

共産党が貧困と格差の問題に積極的に取り組み始めた一昨年秋季以降、新規の入党者は毎月千人、延べ1万9千人に達したという。

それだけに、総選挙に向けた手応えは「大変強い」と言いながらも、自民党か民主党かの政権選択を問う構図が「相当な圧力になっている」ことも認めざるを得ない。

それでも、選挙結果によっては、共産党が政治のキャスティングボートを握る可能性もなくなはない。

「憲法や消費税などの根本で隔たりがある」と、自民党はもちろん民主党とも「政権協力の条件はない」ときっぱり。一方で「総選挙で共産党が躍進できればおおいにやりたいことがある」とも言う。

後期高齢者医療制度の廃止や労働者派遣法の抜本改正など他党と一致できる政策について、積極的に提案し、前に進めていきたいという。

共産党がそんな「政治のリード役」になれるか。そのことが問われる総選挙はもうすぐだ。

朝日新聞論説委員

恵村順一郎

にしぎ
西崎 文子 成蹊大学教授

▼オバマ広島訪問へ最大のチャンス



オバマ米大統領が「核なき世界」をうたった4月5日のプラハ演説は各方

面に衝撃を与えた。広島・長崎の被爆地からは歓迎の声が挙がったし、論壇や各種学会では「オバマ提言をどう受け止めるか」という話題で持ちきりである。ただ、同じ日に北朝鮮が弾道ミサイル発射実験、続けて2回目の核実験を強行したことで、核軍縮は、特に日本周辺の北東アジアでは、複雑な連立方程式を解く作業になってしまった。

米外交史が専門の西崎先生の研究会はまさに時宜にかなった企画で、会場はほぼ満席状態だった。先生の分析によると、プラハ演説は単に理想論を語っているのではなく、ロシアとの新たな戦略兵器削減に関する交渉や包括的核実験禁止条約の批准など、米国がとるべき具体的な道筋を示していた。そして何より、核軍

6・15(月) シリーズ研究会「オバマのアメリカ」⑦ 司会 中井良則事務局長
出席 92人

拡を冷戦という歴史の文脈で位置づけたことが際だっていたという。保有国こそが核軍縮の先頭に立つべきなのだ。それが「道義的責任」というオバマ大統領の言葉だった。

また「核は使われない兵器で、抑止論は洗練された戦略とみなされてきた。それは広島・長崎を忘れさせる構造になっていた」と先生は顧みる。ところが、「大統領があえて『原爆投下』に触れたことで、被爆が現実のものであることをよみがえらせた。核は使われないことはない、抑止論は持ちこたえられなくなると示したのだ」とした。質疑で、大統領の広島訪問の可能性を聞かれこう答えた。「最大のチャンス。彼はそこで彼の歴史認識と核時代に関するメッセージを語るはず」

私もプラハ演説を読み返してみた。時代が変わるのかもしれないという予感が漂う。じっとしてられなくなった。「オバマはナイーブ。北の核開発に対処できない」という批判は確かに根強い。しかし、冷笑的な姿勢だけは取りたくないと思った。

毎日新聞社会部編集委員

滝野 隆浩

はすいけ
蓮池 透氏

▼拉致問題―制裁より対話重視で

「拉致問題を解決するには、制裁より交渉、対話を重視すべきだ」。蓮池さんから直接こんな言葉を聞いて、驚きを禁じ得なかった。かつて拉致被害者家族連絡会(家族会)事務局長として北朝鮮批判の急先鋒だったからだ。

「北朝鮮がすべて悪いという感情論だけでは何も解決しない」「拉致被害者を全員帰国させよ、それができなければ制裁を加えよという姿勢は一種の思考停止ではないか」。2002年の日朝平壤宣言をもう一度読み直し、北朝鮮は日本に何を求めているのか、日本側に約束不履行はなかったかなど、冷静に検証して対話の道を探るべきだと提案した。最近の新聞、テレビは制裁の内容、強さばかりに焦点を当てていると不満も表明した。



北朝鮮の強硬姿勢が続く、日朝

6・18(木) 著者と語る「拉致」
司会 菅沼堅吾委員 出席 100人

対話再開のめどは立たない。「核実験で冷水を浴びせられた思いだ」と蓮池さんは表情をくもらせ、当面はオバマ米政権の北朝鮮政策を見極めるべきだとの見解を示した。

拉致被害者の実弟薫さんが帰国したのは02年10月。家族との対面を終えて再び北朝鮮に戻ろうとした薫さんを「このまま日本にとどまるよ、命がけで説得した」。あのときは短期の一時帰国で日朝両政府が合意しており、「もう二度と放したくない」という家族の思いだけが、弟を引き留めたのだ」という。

拉致問題への視点が変わったのは薫さんから直接、北朝鮮の実情、住民の考え方を聞いたのが大きかったようだ。

蓮池さんはメディアが薫さんの取材で「節度を保ってくれた」ことに謝意を示した。「弟もそろそろ取材に応じる時期かもしれない」とも。薫さんは北朝鮮の情報については口が重いそうだが、なぜ北朝鮮が核保有国になりたいのか、三代続けての権力継承で体制が揺らぐことはないのか、ぜひ語ってほしい。

東京新聞論説委員 山本 勇二

ホーシユヤール・マフムード・ズイーバーリー イラク外相

6・19〈金〉記者会見 司会 脇祐三委員
通訳 池田薫 出席 57人

▼治安の改善強調：厳しい現実

2005年11月以来、2度目の訪日となったズイーバーリー外相。記者会見の冒頭、「この4年間でイラクは劇的に変わった。前回は、治安も経済も最悪で、暗雲が立ち込める中での訪日だったが、今回、私は、イラクの将来に自信と希望を抱いている」と強調した。そのうえで、「日本がこれまでイラクの復興に果たしてくれた役割は絶大で、心から感謝している」。

「今年1月には、両国政府の間で、『包括パートナーシップ宣言』も署名され、関係は新しい段階に入った。これからは、日本の企業やビジネスマンの皆さんにイラクに来ていただき、投資や貿易を積極的に進めてもらいたい。治安は目覚ましく改善しているので大丈夫だ」と訴えた。

会場からは、米軍撤退後の治安維持や汚職の蔓延、クルド自治政府と中央政府の対立など、質問が相次いだ。これに対し、外相は、「イラク



分裂の危機は去った。民族・宗派の違いを越え、統一国家イラクを発展させることで国民は一致している。治安は自力で守れるし、汚職も必ず撲滅する」と、一つ一つ丁寧に答えていった。

しかし、現実には厳しい。この会見の翌日から、北部のクルークや首都バグダッドなどで爆弾テロが相次ぎ、約300人が死亡し、米軍戦闘部隊の都市部からの撤退期限である6月30日を前に、再び治安が悪化している。民族・宗派間の対立の火種も残ったままだ。

「外相の発言は、樂觀的すぎるのではないか」とも感じたが、こう思い直した。「どんな状況でも希望を捨てず、現実を冷静に見据えたうえで最善を尽くす。常に明るさを忘れない」——少数民族クルド人でありながら、混迷する新生イラクの外相の重責を担い続けてきた秘訣は、まさにここにあるのだろう。

NHK解説委員

出川 展恒

福島みずほ 社会民主党首

6・24〈水〉昼食会 司会 神谷哲史理事
和田圭委員 出席 70人

▼条件つけ連立参加へ意欲示す

総選挙間近の登板から当然、選挙に臨む決意表明になる。①いまの社会の問題をどう考えるか②総選挙への取り組み③選挙後、想定される連立政権への参加——この3点について、よどみなく一気に話した。

とはいえ現状の国会の議席は第5勢力の衆院7、参院5の「大きな政党」（福島氏）。それでも世界の政治潮流・社会主義インテリにつらなる「唯一の社会民主主義政党」であり、いち早く派遣労働や社会保障費削減問題に警鐘を鳴らし、環境政策では「脱原子力を唱えるただ一つの政党」と独自性と先見性を誇って見せた。

悲願は総選挙で二ケタの議席を獲得すること。そうなれば党首討論へ



の参加要件が整う。だが自民、民主両極が政権の継続、交代を競う大波に吞まれる危険もある。

現実味があり、関心が向けられるのは政権交代が可能となった時の対応だ。「全ては選挙結果が出てから」と再三、断ったうえで会場で配布した「社会民主党宣言」（2006年党大会で採択）の「主体性を維持しながら具体的な政策課題の実現を目指す、緊張感ある連立政権の形成」のくだりを指しながら条件つき参加へ意欲を示した。

大きな条件は看板の「護憲・平和」になるだろう。1994年、旧社会党の村山富市委員長が首相に担がれた「自社さ」連立政権当時、党の安保政策を大転換させた。そのとき「憲法改正論議を封印したのは良かった」と評価。来るべき連立でも「憲法審査会を9条改正へ動かさない」「民主党にきつとタガをはめて暴走を防ぐ」。ただ一人の女性党首は元気が良かった。ゲスト帳には前回の07年7月と同じ「愛と平和」と記した。

朝日新聞出身

村野 坦

おみ しげる 尾身 茂 新型インフルエンザ対策 本部専門家諮問委員会委員長

6・24(水) 研究会「新型インフル
エンザ」司会 宮田一雄委員
出席 84人

▼メディアは全体像の見える報道を



国や自治体、学校、医療関係者はみなよく今回の事態に立ち

向かったけれど、「それぞれ学ぶべきことがあった、というのが結論です」。新型インフルエンザ対策のかじ取り役である尾身委員長（自治医大教授）の口調は淡々としている

が、次の「第二波」来襲を迎え撃つ緊張感をにじませるものだった。

今回流行した新型インフルの特徴については、①感染力が季節性よりやや強い②多くは軽症で治癒③抗ウイルス剤も有効―と紹介。しかし、「若い人が感染しやすく、糖尿病やぜんそくなどの基礎疾患がある人や妊婦、一部の健康な若者も重症化している」点は油断できない、と指摘した。「こうした感染を防ぎ、犠牲者の数を増やさないことが、われわれの最大の任務だ」

秋以降の感染拡大はどうなるの

か。どう備えたら良いのか。「南半球の寒さは7月が本番。世界的にはさらに広がる恐れがある。日本でも、夏になってもじわじわ感染が続くのではないか」と予測。「冬には感染性を強めた、より大きな感染の波が来ると覚悟して対応すべきだ」と表情を引き締めた。

そして、感染動向をいち早くキャッチするためのサーベイランス（監視）と医療体制の整備、新型ウイルス用ワクチンの製造・備蓄などを喫緊の課題として挙げた。

報道にも一言。「マスコミが発する情報は、政府や世界保健機関（WHO）より強力な場合もある。マスクが売り切れた、といった表面的な現象を追うだけでなく、距離を置いて全体像が見えるような記事も丁寧に載せてほしい。重要な情報を柔軟、機敏に出せないのなら、官僚の硬直性など批判できないのでは？」

尾身さんが担うのは、政策決定者に正確な医学情報を伝え、合理的な判断を促す仕事。次の機会には是非、日本の政治家の科学リテラシーについてうかがいたいと思った。

読売新聞科学部長 柴田 文隆

あそう たらう 麻生 太郎 首相

6・25(木) 記者会見 司会 斎藤史郎理事長
出席 264人 写真 栗田格会員

▼「遠くない」発言が波紋を

政局が緊迫するなかでの麻生太郎首相の記者会見、エキサイティングな場面となった。

麻生氏はまず「いずれ質問されるから」と前置きして「衆院解散はそう遠くない」と発言した。「遠くない」とはいつのことか、その後の政局に大きな波紋を呼んだ。

首相が訴えたかったテーマは「私の目指す安心社会」である。「就任以来、経済と景気の一点に努力、4度の予算編成で明るいきざしがみえてきた」と述べた上で、次は「未来の安心社会の姿と道筋を示したい」と語った。

首相は、「豊かさや平等」を実現してきた自民党政治にも「ほころび」が出て「ワーキングプアやニートや子どもの貧困」などに十分対応でき



就任後初の司会を務める斎藤理事長（右）

なかったと反省、そして「安心の基盤は雇用」と述べた。「切れ目のない社会保障」への信頼回復、骨太方針2009も策定、「総選挙に勝利してこれらの政策を実現したい」との意気込みをみせた。

国民の政治への不満に対し「真剣に反省」し、「市場だけではうまくいかない」「小さな政府至上主義ではなく、機能する政府、簡素で温かい政府をつくりたい」「自民党は変わる」などと表明した。麻生政権9カ月、総選挙を目の前にしての長期ビジョンの提示である。

さて、この後の質疑は白熱した。首相は、内閣・党人事について慎重姿勢を示し、きたるべき東京都議選は「勝てるし、勝たなければならぬ」と力説した。

自民党総裁選の前倒し実施には「自民党のイメージにはマイナス」と否定し、あくまで麻生首相の手による解散・総選挙を模索する姿勢を見せた。

朝日新聞コラムニスト 早野 透

峰久 和哲 朝日新聞編集委員

6・26(金)研究会「世論調査」①
司会 川戸恵子委員 出席 93人

▼世論調査は政権交代を暗示

報道機関が行う世論調査の結果が今ほど、政治に影響を与えることはなかった。支持率が党首の進退に直結し、まるで「世論調査政局」だ。

世論調査、その報道に関する実績と分析力、見識において、峰久さんの右に出る人はこの業界におそらくいない。

彼は囲碁六段。政治家と打つき、与謝野馨財務相が二目、小沢一郎民主党代表代行が四目置くというのだから、相当な腕だ。その囲碁で鍛えたのだろう、思考が相当に緻密だ。

峰久さんによると、世論調査の主流となっているRDD方式は小泉内閣発足(2001年4月)前後から飛躍的に普及。その背景には、それまでの面接調査に比べ費用が10分の1で済む安さや、迅速性、外注化があるが、米国ではその精度が疑われる。



興味深かったのは、最近の調査対象者の傾向だ。R

DDを始めた頃、安全保障、経済など難しい質問には考え込まれ、調査に時間がかかった。ところが、最近はどうも難しい質問にも「ほとんど即座に、軽やかに答えが返ってくる」という。その傾向から、峰久さんは現在を「空気を必要以上に読む時代」と分析する。

一方、「世論調査報道には節度が必要だ」と説く。調査には常に、10%程度のメイキング、つまり調査員が勝手に回答を記入したり、回答者が知ったかぶりして答えたりするところがあるそうで、「たかが世論調査、されど世論調査。信じ過ぎない、疑い過ぎない」のが心構えと言う。

峰久さんは最後に、次期総選挙について次のように大胆に見通した。「自民党が抱えている問題は麻生首相の首をすげ替えれば何とかなる問題ではなくなっている。それは世論調査でも裏付けられ、政党支持率が明らかに民主党優位だ。女性も民主支持が高くなった。低支持率を、首相交代を望む声と読むべきではない(世論は)政権交代を望んでいる」

時事通信解説委員長

田崎 史郎

まつなが やすゆき 松永 泰行 東京外国語大学 准教授

6・30(火)研究会「イラン大統領選挙後の政治危機」司会 脇祐三委員 出席 52人

▼イラン体制の質的变化を説く

大統領選後のイランの政治対立が、連日大きく報道される中、OB会員も含め熱心にメモを取る人が目立つ研究会だった。

その研究会で松永氏は、革命後30年のイランの構造変化を、革命世代と第2世代の主導権をめぐる争いを軸に、論理的に説いた。

大統領選で不正があった否かにかかわらず、「アフマディネジャド大統領の再選は確実だったろう」というのが松永氏の基本的認識だ。イランへの関与・対話政策を打ち出した米オバマ政権も、イランの政権継続を織り込んでいたように見える。

今のイラン政権は、最高指導者ハメネイ師がアフマディネジャド大統領ら革命防衛隊人脈の第2世代と連携する体制だ。そして第2世代は革命世代の有力聖職者の特権階級化を糾弾し、非聖職者が主導権を握ることで革命体制を維持しようとしている。政治の変化の背景にある世代間の対立軸を、松永氏は印象づけていた。大統領選の直前のテレビ討論で、アフマディネジャド大統領は「過去



24年間の老世代の統治が残した問題と、私は過去4年間闘ってきた」と訴えたという。その結果が、テヘランと辺境地帯以外での大統領の圧勝をもたらした、と松永氏は

整理する。

大統領選後の政治危機の展開として、①短期的には最高指導者ハメネイ師が改革派を抑えて勝利する②中期的には第2世代の非聖職者が主導権を握るが、第2世代とハメネイ師の摩擦も起き得る③長期的には第2世代の治安保守勢力と自由化を望むサビ元首相を支持した都市中間層の勝利もあり得る——これが松永氏の基本的な読み筋だ。

IT革命に伴う政治環境の変化も含め、イランの政治構造の変遷と革命体制の質的变化を門外漢にもわかりやすく伝えた研究会といえる。

日本経済新聞論説副委員長

脇 祐三

選挙取材班この10カ月

かくも長い助走期間

麻生さん、準備万端です！

▼原田 悟

(東京新聞政治部)

本紙に次期衆院選を見据えた選挙取材班が編成され、その一員となつて10カ月。同僚や取材相手と顔を合わせると、必ず「で、いつなの？」と投票日の見通しを聞かれるが、相変わらず麻生太郎首相の頭の中が読めず、言葉に詰まる。そもそも、かくも長い助走期間になること自体、予想もできなかったのだから…。

昨年9月2人だけで船出

忘れもしない、昨年9月1日深夜。自民党担当として、福田康夫首相の唐突な退陣表明の関連記事執筆に追われていた時、政治部から「あすから本社に上がってくれ」と選挙班立ち上げの連絡が届いた。翌2日、担当デスクと筆者の2人という陣容で選挙班は船出した。

当時、麻生氏が自民党総裁選で勝利した後、ほどなく衆院解散に踏み切る腹を固めているであろうことは、政治記者でなくとも共通認識だ



選挙班は新年企画班に衣替え その後 遊軍班を経て再始動

った。自民、民主両党が、あらかじめ政権の枠組みを示して選挙を戦い、政権交代が実現すれば、加藤高明内閣以来、85年ぶり。歴史の転換点になるかもしれないから、最初からアドレナリンは全開で、手始めに首相動静のように時系列で政治の動きを紙面に記録する「ドキュメント政権選択」をスタートさせた。

選挙班は追加招集が続く、一気に膨張した。通常、国政選挙の準備には3カ月を要するが、今回は10月26日投票とも目され、時間との戦い。単発の狙いもの記事を「粗製乱造」しつつ、各党の政策を掘り下げる連載企画などを次々と紙面化した。日曜には、公示・開票日を想定した紙面製作のテストを繰り返した。

だが、麻生首相は、なかなか解散を決断しない。一時は確実だった11月2日投票の日程は消滅。徐々に世間同時不況の様相が色濃くなり、首相周辺からは「選挙より景気対策を優先すべきだ」との発言が相次ぐ。

最後の解散Xデーといわれた10月末、首相が新たな経済対策を発表して先送りが確定し、解散風は「木枯らし」に変わっていった。

10月、解散したのは選挙班

結局、解散したのは衆院ではなく、選挙班だった。あとに残ったのは大量の予定稿。「ドキュメント」も紙面から自然消滅した。解散先送りに対しては、野党ばかりか与党からも不満が漏れたが、選挙班にも虚脱感が広がったことは言うに及ばない。

ただ、選挙報道という観点では、解散先送りは副産物をもたらした。選挙班は、発展的に解消して新年企

画班の中核として再出発。雇用や医療といった重要政策について、QRコードなどで読者に二者択一の選択を募る新機軸を打ち出した。その後も遊軍として存続し、紙面化した企画は今年6月時点で二けたを突破した。さまざまな角度から政党や政策をとらえ、読者に考える材料を提供できたし、自分としても財産になった。

公示・開票テストも最多タイの14回に達した。「自公、過半数を確保」「民主が第一党」など、考え得る政権の枠組みの本記は書き尽くし、熟練の域に達したと自負している。解散時期をめぐり、今も政界はざわついていて、もはや誤差の範囲。今度こそ、政権選択を懸けた暑い夏になる。選挙班も再始動した。首相には、いつ解散があっても準備万端だと言っておきたい。

もつとも、麻生政権の弱体化は著しく、当欄の掲載時に、首相の立場に何らかの異変が起きていても不思議はないほど。自民党に浮上のきっかけも見えない。麻生さん、やはり昨年秋季に解散した方が、お互いに良かったんじゃないでしょうか。

はらだ・さとる 1991年入社 名古屋社会部 岐阜支社 横浜支局などを経て政治部 2008年秋から選挙班

足利事件と報道

反省と教訓

事実に対する謙虚さ欠く

▼竹田 昌弘

(共同通信編集委員)

足利事件は再鑑定によるDNA型不一致という明白な新証拠で、再審が決まった。年内にも菅家利和さんの無罪が確定する。宇都宮地裁の一審公判を取材した者として、不明を恥じつつ当時を振り返り、事件の取材・報道について考えてみたい。

供述依存、DNA鑑定うのみ

菅家さんは1999年12月1日朝、栃木県警の捜査員から任意同行を求められた。県警は同県足利市で90年5月、絞殺遺体で見つかった4歳の女児の衣服に残された体液のDNA型が、菅家さんと一致したとする鑑定結果を得ていた。その日の夜に菅家さんは自白し、逮捕された。各社は「かわい子だったので声をかけた」「騒がれては困ると思い殺した」といった供述内容を報道したほか、「ミクロの捜査」などとして、DNA鑑定が決め手になったことを伝えた。菅家さんが自宅とは別に借

りていた家から多数のアダルトビデオが押収されたことも報じた。

菅家さんは公判でも罪を認めたが、初公判前後に家族へあてた手紙に「無実です」と記し、92年12月の第6回公判で「やっていません」と公の場で冤罪(えんざい)を訴えた。

私は92年夏から裁判の取材に加わった。菅家さんが弁護人にも罪を認めていたことやDNA鑑定結果から有罪とみていた。足利事件の約2年前、アダルトビデオが大量に置かれた宮崎勤元死刑囚の部屋の映像が頭にあり、予断もあったように思う。

各社の供述報道について、田島泰彦上智大教授は「メディアが直接検証できない自白内容に頼っていた点が大きな問題」と指摘した(6月23日配信記事)。

確かに、供述内容を中心に捜査情報に依拠しすぎているという批判は現在に至るまである。裁判員制度の導入を契機に各社が作った指針やガ

イドラインに、情報の出所明示や捜査機関側と容疑者・被告側の「対等報道」が盛り込まれたのも、そうした批判を踏まえたものだ。

ただ菅家さんの場合、弁護人は自白を受け入れ、法廷で否認したときも「直前に極刑を望むという被害者の遺族の手紙が読み上げられ、怖くなったのでは」と話した。対等報道は難しく、こうしたケースは課題だが、最近は被告と接見できるので、直接話を聞いてみる手はある。

「澄んだ目」改革の可能性

一方、DNA鑑定については、同型出現率が千人に1・2人もあり、弁護人は結果が間違っている可能性を主張した。しかし「鑑定の歴史は浅く、同型出現率を考えれば慎重を期さなければならぬが、科学的根拠に基づくもので、これまでに誤りが生じたこともない」という一審判決と同様に考えてしまった。

この点は、田島教授の「専門家の意見や評価を加え、もっと批判的に吟味すべきだった」との指摘通りだ。科学捜査であっても検証に努めなければならず、事実に対する謙虚さを欠いていたと反省している。

また多数のアダルトビデオを持っていたことは、捜査員が菅家さんを

疑うきっかけにもなったとみられ、予断の怖さを痛感している。裁判員裁判に向け、予断を与えない報道の在り方をさらに考えていきたい。

「裁判員の中には(足利事件で)証拠の評価は難しいと思う人もいるかもしれないが、市民の澄んだ目で事実を見てもらいたい」。二審以降、菅家さんの弁護人を務める佐藤博史弁護士は記者会見でこう述べた。

菅家さんが無実を訴えていることを知り、最初に支援に立ち上がったのは1人の主婦だった。逮捕当時の新聞には「DNA鑑定と言っても指紋とは違う」と指摘する会社員の投書も掲載されていた。公判を傍聴したフリーライターは一審判決後、法律雑誌に「被害者の描写など自白に含まれるはずの供述がないのに、判決は疑問を持っていない。DNAの魔力ゆえだろう」と寄稿した。

裁判員制度には厳しすぎる守秘義務など課題が山積しているが、こうした市民の「澄んだ目」が加わると、司法は大きく変わる可能性がある。取り残されないようにしたい。なお二審を取材した共同通信記者は現在弁護士で、朝日新聞に「さんの気持ち」を投書した(6月12日朝刊)。

ただ・まさひろ 毎日新聞を経て1999年入社 09年2月から社会部編集委員

ETC高速値下げの明暗

苦境に立つ公共交通
フェリー会社直撃

■ 広瀬 大

(四国新聞社報道部)

ゴールデンウィーク最終盤、テレビ画面に高松自動車道(香川県)の混雑ぶりが映し出された。四国の渋滞状況が全国中継されたのは、おそらく瀬戸大橋など本四架橋の開通直後を除けば初めてのことだ。

ETC搭載車を対象に、高速道路の大幅割引が始まってから最初の大型連休。1000円乗り放題、さらに1000円上乗せすれば瀬戸大橋など本四架橋も通行できるインパクトは予想以上で、連休中の高松自動車道、瀬戸大橋は過去最多の交通量を記録。香川県内の行楽地の人出も初めて100万人を突破した。



本州と四国を結ぶフェリー 高速道路値下げの影響で利用者が減っている 高松港

だが、讃岐うどん店や観光施設にぎわった一方で、公共交通機関はかつてない苦境に立たされている。最も深刻なのは海上交通だ。四国運輸局によると、昨夏以降、本四架橋と競合する3航路が廃止または休止に。6月末には愛媛県と広島県を結ぶ呉・松山フェリーが廃業した。橋の開通や原油高で苦しい経営が続いた中、高速1000円に伴う利用減少が決定打になったようだ。

運航を続ける事業者も状況は厳しい。高松(香川県)―宇野(岡山県)間のフェリーは連休中、乗用車が半

減、旅客も2割強減り、過去最低の輸送水準となった。運輸会社は「国から5000億円もらって値下げする相手にかなうはずがない。不公平な政策で50年続けた商売が台無しになる」と嘆く。

フェリー以外の公共交通も連休中は高速道路に利用者を奪われた。JR四国は利用者数が1割以上落ち込み、JRグループのうち2けたの減少幅は四国だけだった。利用減に加えて大渋滞に巻き込まれたのは高速バス。東京方面の夜行バスで遅れが相次ぎ、なかには翌朝の四国到着が夕方にならなくなった。自然災害以外でここまで遅れが生じたことは過去になく、バス会社は今後の対応に頭を抱える。

もちろん各事業者はあの手この手で客足を取り戻そうとしている。JR四国は週末の割引乗車券を発売。船内漫画喫茶をPRするフェリー会社もあり、マイカーとの差別化に躍起だ。しかし、「料金格差があまりに大きい」との悲鳴は止まない。

国は差し当たり、フェリー事業者の運航効率化やサービス向上の取り組みを支援するため、本年度の補正予算に対策費を盛り込む

だ。だが総額は全国で30億円と限られ、各社の根本的な経営改善につながらないとの見方が強い。

高速道路の値下げが本当に2年期限定なのか不透明なのも問題だ。四国運輸局は「値下げの初物効果」を見極めて対応したい」とするが、各事業者は宙ぶらりん状態が続くことにいら立ちを隠さない。特にフェリーは、存廃を含めて先行きの不確定なルートでは運送会社などに敬遠されるといふ。

環境に優しい公共交通の利用を促すモーダルシフトの掛け声もかき消えた格好。場当たり的なハイウエー偏重の「景気対策」が、地方の公共交通機関のあり方を根本から揺るがしている。

ひろせ・だい 1998年入社 編集委員
室勤務を経て本社報道部

一口メモ 瀬戸大橋

1988年4月10日に開通。上下2層に道路(瀬戸中央自動車道)と鉄道(JR瀬戸大橋線)を渡す併用橋で、香川県坂出市と岡山県倉敷市を結ぶ。「瀬戸大橋」とは、北・南備讃瀬戸大橋など海峡部の9.4kmに架かる橋6本の総称。同自動車道のほぼ中央にある与島パーキングエリアは、雄大な橋の姿と瀬戸内海の多島美を存分に楽しめるビューポイントとなっている。

私が会った アイザック・スターン

リレーエッセー⑧

「演奏には技術も大事だけれど、もっと大切なのは心だよ」

この言葉と、ギョロリと大きな目玉。名ヴァイオリニスト、アイザック・スターン(1920―2001)である。

スターンは晩年、九州の宮崎で5月に開かれる宮崎国際音楽祭に毎年やって来た。演奏するだけでなく、若い人たちの演奏を聴き、アドバイスするのに、時間を惜しまなかった。冒頭の言葉も、そんな場面でのことである。

スターンは1953年の初来日以来、たびたび日本で演奏会を開くようになった。

彼と初めて親しく話をしたのは、何度目かの日本公演の時に開かれたパーティーであった。何人かで丸いテーブルを囲んでいるそばを通ると、スターンが、こっちへ来いと手招きする。記者会見で質問した顔を覚えていたのか、ぐらいい思っ、そばに行く、私のグラスを指さして「何を

飲んでいるのか?」

「ウイスキーの水割り」と答えると、「日本にはサケという、こんな旨いものがあるのに」と言っ、ぐい飲みを口元へ持っていった。あの時の満足そうな顔。

1996年から開かれている宮崎



音楽は心だよ♪

富永 壮彦

度聴いた。スターンがこの音楽祭の心に、精神に、魂になっ、の肌で感じるようになった。パーティーでのスターンは、升酒を樂しそうに遣っていた。

宮崎音楽祭の会場、宮崎県立芸術劇場の大ホールは、アイザック・スターン・ホールと名付けられ、この劇場のメインホールになっている。

今年の5月もこのホールに座り、スターンのギョロリとした目を感じながら、うまい演奏家はたくさんいるけれども、技術に優れているだけでは駄目なんだよな、心がなければ。これは、日本だけではない。世界の今の音楽界が心しなければならぬ問題だろう、などと考えた。



とみなが・たけひこ
会員(元共同通信
文化部クラシック音
楽担当)

写真 演奏会の合間に 若手
演奏家たちを熱心に指導する
スターン ©X.Mituna

□会議報告□

第303回会報委員会

(6・12 シルバールーム)

7月号の編集について協議した。

出席 住田委員長、近藤、菅谷、富田、枇杷田、堀、村澤の各委員。

第388回企画委員会

(6・18 Cホール)

司会担当の委員が行事を報告した後、今後のゲスト候補などを協議した。

出席 船橋委員長、小此木、坂東、脇、原田、王利、長谷川、菅沼、影山、山崎、川戸、井田、広瀬、泉、瀬川の各委員。

第382回会員資格委員会

(6・18 小会議室)

7月1日付の会員入退会を審議し、理事会に答申した。

出席 朝倉委員長、森、布施、金子、坂本、齋藤、川嶋、工藤の各委員。

■記者たちよ ハンターになれ!

元・毎日新聞主筆でクラブの副理事長を務めた木戸湊さん(大阪在住)から、回想録『記者たちよ ハンターになれ!』(新風書房)を寄贈していただきました。「記者の生きがいはスクープ」と情熱を燃やした現役時代の11のエピソードを紹介。「ジャーナリストをめざす若者や激務にたじろぐ新人記者たちにも読んでもらいたい」(まえがき)と語っています。クラブの書棚の「新着書」コーナーに置いてあります。

長嶋と王が「クビになった日」

—華やかなプロ野球のもう一つの顔—



菅谷 齊

プロ野球は華やかな世界である。大勢のファンを球場に集め、ビジネスとしても成り立っている。その隆盛をもたらし、象徴でもあったのが長嶋茂雄と王貞治だった。そんな最大の功労者も賞味期限が切れたと判断されれば、ようしやなく放り出される。長嶋と王はともに監督のとき「クビ」の憂き目にあった。その非情はプロ野球のもう一つの顔でもある。

私は共同通信の現役記者時代に解任された二人を最前線で取材した。両雄の「クビになった日」はどうだったのか。

●長嶋の不覚 解任の外濠が：

1981年10月21日、午前6時55分。野球人にとっては超早朝時間

に電話をかけた。すぐ受話器が取られ、取材相手が直接出た。

「監督、解任の情報があります。事実ですか：」「ああ、そのウワサなら、私も聞いているよ」

声の主は巨人監督の長嶋である。巨人は前日、ペナントレース最終戦（広島カープ）に勝って3位を決め、その日のうちに広島から帰京した。球団はすでに「長嶋解任」の最後の準備に入っていた。

「（解任は）あるかもしれないな。ひよっとするかもしれないから一応、予定稿を用意していた方がいいぞ」

予定稿とは解任のニュース原稿のことである。長嶋は球団のバックがマスコミであることから新聞社の中に詳しくあった。そして付け加えた。

「午後に（巨人球団の）役員会がある。そこでひっくり返るかもしれないから、そこだけは注意しておいた方がいい」

長嶋の話し方は他人事だった。樂觀的にも聞こえた。その根拠は球団幹部から、3位になれば続投、とささやかれていたことと、この長嶋茂雄を切れるものか、という自負があったからだろう。

続いて巨人の球団代表に電話を入れた。「巨人軍は、大英断、をした」との答え。天下の長嶋のクビが飛んだ。信じられない出来事が現実となった瞬間だった。長嶋解任にマスコミ各社は慌ただしい動きをし、あつという間に全国に広がり、長い騒動に突入した。

巨人担当だった私が、おやつ？

と思ったことがあった。夏休みが終わったころ、球団代表に秋季練習のことを尋ねたとき、あやふやな答えだったからである。前年秋、長嶋は巨人再生を目指して若い選手を「地獄の伊東キャンプ」（静岡県）で鍛えた。それが2年目の鍛錬予定が未定…。夏ごろからOBを含めた球団関係者の間で長嶋の采配への批判が強まり、秋には解任の流れが決まっていた。長嶋の一生の不覚である。

長嶋は解任会見（球団は辞任会見とした）で、充血させた目で正面を向き、声を絞り出して言った。「男のけじめ、です」。前夜から一睡もしていなかったのである。だから早朝の私の電話にすぐ出たのだろう。

●王の屈辱 シーズン中の解任通告

長嶋解任騒動のあおりを食ったのが王だった。この年限りで現役を引退したのだが、王の「男のけじめ」のビッグニュースが吹き飛んだ。22年間で大リーグ記録を上回る通算868本塁打、最初の国民栄誉賞（福田赳夫首相時代）。日本球界の誇る世界のバットマンの引退発表は長嶋騒動の余波で騒がしい11月4日と遅れた。その後、王はオープン戦で各地を回った。

私は王の衝撃的なシーンを目撃し



1984年、ロサンゼルス五輪の取材時に共同通信のプレスルームを訪問した長嶋茂雄氏。その右が筆者。右端は当時ロサンゼルス支局長だった石川聡・現社長

た。その最終試合、熊本・藤崎台球場での阪神タイガース戦のことだった。試合前、古ぼけた巨人選手の更衣室に入ると、その一番奥で木製ベンチに座って背を向けた王が帽子に顔を埋めて鳴咽し、栄光の背番号1が震えていた。公式戦の最終試合で「巨人軍は永久に不滅です」と絶叫し、ファンの涙の中で劇的な現役引退をした長嶋とは対照的な王だった。それでも最後の打席で広い右翼へホームランをかつ飛ばし、ホームラン王にふさわしい最後のスイングを見せてバットを置いた。

王は巨人監督としても悲惨な状況でその座を追われた。1988年9月29日の朝早く、私の自宅に信頼のおけるニュースソースから電話が入った。「王が辞める。今日、明らかになる」と。公式戦を4試合残した時点で「解任」を通告されたのである。王に電話を入れた。「そうなる」と解任を認めた。

夏の終わりが、王の監督続投についてさまざまな憶測が流れた。「続投」と報道したマスコミもあったが、内実は不確実だった。神宮球場に巨人が来たとき、王に直接尋ねた。王の返事は「監督について

は本社の決定事項なんだ。だから皆目分らない」。そういう会話を交わしていたから、解任の情報を得たときは、解任について驚かなかったが、ただシーズン終了前の時期は信じがたかった。

この年、日本初の全天候型の東京ドームは完成。その元年に優勝することができなかったことも響いた。2位にもかかわらず球団幹部は「王では客が呼べない」と言っ

た。

私は長嶋が解任されたとき、貴重な勉強をした。それは、長嶋は絶対にクビにされない、という思い込みが甘かったことである。長嶋でもクビになるのがプロ野球の世界、という現実を知った。だから王の場合は、そのときが来たか、と冷静に対処できた。

● ONの「それから」

長嶋は浪人して「文化人」と称された。ある年、大洋ホエールズ（現横浜ベイスターズ）の監督に就任の情報をつかんだ。大洋の関係者からで、そのとき「長嶋さんらしい入団会見をしたいのだが」と相談を受けた。「入団会見を終えたら成田から米国に飛んでワールドシリーズ観戦というのはいかが」とアイデアを出した。「大リーグ好きの長嶋さんらしくいいね」と大乗り気の返事だった。しかし、その話はすべて消えた。ある大物財界人に反対されたから、というものだった。その後、12年間の空白を経て巨人監督に戻った。

浪人中の王は「社会人の勉強をしたい」と前向きな姿勢を示した。王は単独でどこへでも出向く。いつも取り巻きと行動する長嶋とは好対照

である。そんな王の親しい方から「王は巨人監督復帰にこだわってはいない。どこの球団でも話があれば聞く」と言われた。間もなくしてダイエー・ホークス（現ソフトバンク・ホークス）の監督に迎えられた。

長嶋ジャイアンツと王ホークスが2000年の日本シリーズで対戦したのがONの絡んだ最後の華やかな舞台だった。その後、長嶋は五輪監督、王はWBC監督となった。長嶋が倒れると、王も病んだ。そして今、リハビリに励む長嶋に対し、王はコミッショナー補佐となり、球界のボスとなった。主役交代の感がある。

ファンから反発を受けた長嶋、王の解任劇の中で、巨人は藤田元司を巧みに使った。監督を長嶋―藤田―王―藤田―長嶋とつなぎ、ONを打順のようにつなげることなく分断した。そのため両雄が比較されることはなくなった。大人の知恵、と思った。

すがや・ひとし会員 1943年東京生まれ 法政二高の硬式野球部時代に夏の選手権大会、春の選抜大会で連続全国優勝を経験、69年共同通信社に入社、運動部記者、プロ・アマ野球、大リーグなどを担当、ロサンゼルス五輪特派員、本社スポーツデスク部長、プロ野球記者会代表幹事、野球殿堂入り競技者表彰選考代表幹事、現在スポーツジャーナリスト

MY BOOK MY PR

木版画 万葉秀歌

宇治 敏彦

(中日新聞社相談役・論説担当)
趣味が高じて本に「これは宇治ワールドだね」と友がいった。国文学者の中西進氏は「影を刻むことで形を描く。それが宇治さんの生き方でもある」と序文に書いてくださった。万葉集の一首一首をイメージしながら歌の文句とともに版画に仕上げる趣味が小著になった。作者としては望外の幸せだが、大伴家持の編纂から1250年の今年、言霊を信じた先人たちの思いを現代人の心にもつと響かせたいとの願いもある。恋に焦がれ片思いに耐え、歌に救いを求めた万葉人の姿をどこまで表現できたかは読者の判断に待ちたい。

(蒼天社出版、1、890円)

新訂 新聞学

桂 敬一

(日本新聞協会出身)
新聞を新しい立ち位置へ 今ほ亡き稲葉三千男・新井直之両先輩とともに旧版『新聞学 第3版』(1995年)を編んだ私としては、この伝統の書を、東大新聞研・教授時代の同僚・浜田純一さん(東大総長)と

畏友・田島泰彦さん(上智大教授)

と一緒に編纂、新しい装いで再生できたことは、この上ない喜びだ。ネット時代、危機に臨む新聞の問題を考えるすべてがここにある。新しいジャーナリズムの基盤を構築し、中核となるべき新聞のあり方に関心を抱く若いジャーナリスト・研究者に、ぜひ読んでいただきたい。

(日本評論社 3、150円)

プーチンと柔道の心

小林 和男

(NHK出身)
柔道を通して見た人物像 プーチン首相が訪日したが、記者クラブ幹部の皆さんが礼を尽くしたにもかかわらず会見にはやってこなかった。過密な日程を理由にしたらしい。そもそも彼は記者会見が嫌いではない。3時間もやることもある。行動に分からないところが多い。そんな人物を柔道を通して見ようというのが本書の狙いだ。プーチン首相と仲間が書いた柔道書に山下泰裕さんと私が解説などを加えた。不可解な人物が少し見えてくるかもしれない。

(朝日新聞出版 1、680円)

だらばち記者奮闘記―昭和と平成自分史

畠中 茂男

(毎日新聞出身)

新聞記者の抱腹絶倒自分史 だらばちとはヤンチャな子どもに対する愛情表現の能登弁だ。波瀾万丈、ジグザグの私の軌跡を書いた。新聞記者とは「特種記者」だけではない。事業や催しで本社に貢献する「イベント記者」もいる。これをやりとげた先輩に学ぶこと多し。

社の経営不振を立て直すために政治部から小さな支局長へ飛び出す。「いまやらねばいつできる、わしがやらねばだれがやる」の「平櫛語録」とおりに大阪毎日ホール再建、毎日情報サービスセンター創設、アジア調査会再建に挑戦する。愛社精神を貫くことが大切だと悟る。現在の世界同時不況時代には愛社精神のあふれた記者を多く持つ社のみが生き延びるだろう。

(自費出版)

寄贈していただきました。ラウンジ書架の「新着書」コーナーにあります。会員の皆さんの新刊書を紹介しています。自著の狙いやポイントを2000字程度でおまとめいただき事務局本庄までお送りください。

囲碁の会 夏季大会
荒井会員が4連覇

恒例の夏季大会が6月27日に行われ、荒井忠男会員(写真)個人D・毎日新聞OB)が全勝で、4年連続の優勝を果たしました。佐伯安彦会員(個人D・時事通信OB)も全勝でしたが、1ポイント差で準優勝に。参加者は27人。主な順位は以下の通り(スイス方式 敬称略)①荒井忠男②佐伯安彦③本田来介④相川誠一⑤佐沢利和⑥山城孝夫⑦田中信義⑧吉川真澄⑨田川五郎⑩竹尾新吾。

●若人よ出でよ

4連覇は嬉しく、誇らしく思います。しかし、喜んでばかりいられない気がします。正確なデータを持っているわけではありませんが、どうやら当会では今年71歳の私が最年少なのかもしれないのです。若い人のエントリーがありません。当会の老化と衰退は、若い人が碁を打たなくなったという日本の碁そのものの相対的衰退(韓国や中国に勝てなくなった)と軌を一にしているようで、残念でなりません。(荒井忠男)



●中国の真実は農村に宿る

朝日新聞論説委員 藤原 秀人
©ドキュメンタリー・ドリームセンター

立ち退きも思うようにはいかない。社会主義中国では土地は個人のモノではない。乗愛は懸命に役人と交渉するが、小屋住まいを余儀なくされる。世界同時不況のなか、内需拡大を目指す中国は、鉄道や道路の建設ラッシュだ。きつと何人もの乗愛が立ち退きや補償をめぐって、役人と闘っていることだろう。

中国人も太陽暦で生活しているように見えるのだが、実際の暮らしでは、太陰暦である農曆をふつうに使う。最も大切な休日である正月元日の春節は1月1日ではなく、今年は1月26日だった。去年は2月7日で、来年は2月14日となる。紛らわしい。多くの人がそう思うだろうが、特派員生活で知り合った中国人で、農曆と太陽暦の併用を面倒くさがる人はまじない。中華人民共和国が建国された60年前、都市と農村の人口比は1対9だった。都市青年を農村に定住させる運動も長く続いたため、中国で農村と無縁な人は例外といえる。

長江にいきる ピンアイ 乗愛の物語 (6・12)

だから、この映画「長江にいきる」は、三峡ダム建設で立ち退きを迫られる農民の姿を活写しているのだが、北京や上海といった都会で暮らす人たちが見ても、すっと胸に落ちるところが多いに違いない。

ヒロインの乗愛は農村から出たことのない働き者の妻であり母である。子どもには農村以外の生活をさせたいと思っている。中国では都市の安定を優先させるため、戸籍を都市と農村に分けている。農民が都市戸籍を得るには、大学を出て都会で就職するのが一般的な道だ。だから、乗愛は高校に通う長男にしかわくちんの百元札数枚を渡してしまい、一文無しになるのといとわかない。だが、長男は入試に失敗し人民解放軍兵士になる。



「ベビーホテル」仲間で 堂本さん、おつかれさま！

天真爛漫で昔のまま。あのときのキャンペーン中のすさまじさが脳裏をよぎる。

「ベビーホテルってどんな所ですか、レポートしてください」――視聴者からの1枚のメッセージが運命を変える。調べてみると狭い部屋に赤ちゃんが折り重なるように置かれ、業者は金目当て、行政は知らん顔…堂本さんの並外れたエネルギーが、この国の福祉の貧しさを次々と暴いていった。そしてついに国会

前千葉県知事の堂本曉子さんを囲んでの「おつかれさまパーティー」が6月4日、プレスセンタービル9階のクラブ大会議室で開かれた。

記者から政治の世界に飛びこんできたきっかけはTBS在職中の「ベビーホテル・キャンペーン」の仕事。舞台になった当時の報道番組「テレビポート」のスタッフを中心に、クラブ会員の村登紀夫さんら彼女を支えた厳選40人の仲間が集まる。選りすぐった顔だけに堂本さんとはツーカ1の仲、たちまち懐かしい同窓会になる。

「異境」、政治の修羅場で刻んだ思いもよらぬ後半生なのに、ご本人は

を動かし、児童福祉法の改正をみる。法の網をかぶせることで長いキャンペーンは一応終結するが、ここから道は急カーブを切る。請われて参議院議員へ、そして新党さきがけでは議員団座長として連立与党の重責をになう。今度は一転、知事として千葉を元気にする。記者から議員、知事への3段跳び、まあ、猛女(?)三遷ですか。

パーティーでは、テレビに青春を賭けた仲間の30年前の熱気がよく見え、長旅の終わった堂本さんは輪の中で輝いていた。

元TBS報道局プロデューサー

三好 和昭

情報発信

クラブ施設では会員による各種の会合が行われています。企業や大使館などの賛助会員も記者発表の場としてクラブを利用しています。

■農政ジャーナリスト賞表彰式

農政ジャーナリストの会（合瀬宏毅会長 <http://www.jaja.cside.ne.jp/>）の総会で、今年の農政ジャーナリスト賞の表彰式が行われた。受賞したのは以下の3作品。▼南日本放送が過疎高齢化集落の再生活動を12年間にわたり取材した特集「やねだん〜人口300人、ボーナスが出る集落」▼読売新聞のキャンペーン企画「食ショック」▼日本農業新聞の食料争奪の最前線を追ったシリーズ報道「食料有事」。また、総会の前に、伊藤元重・東大教授が記念講演を行った。（6.1 宴会場 大会議室）

■同盟クラブ 新会長に山内氏

同盟クラブ（<http://a7.wx302.smilestart.ne.jp/doumei/>）が会員総会を行い、会長を2年務めた前田耕一氏が退任し、後任に山内豊彦・前共同通信社長が選任された。（6.2 10Fホール）

■「こころを育む総合フォーラム」記者会見

同フォーラムは宗教学者の山折哲雄氏を座長に16人の有識者で構成されている。07年に家庭、学校の見直しなどを骨子とした提言をまとめ、08年から具体化のための全国運動を始めている。会見では、この1年の運動の報告や今年度の活動事例募集要項などが発表された。HP=<http://www.kokoro-forum.jp/>（6.2 宴会場）

■山中京大教授がiPS細胞バンク構想を発表

生命科学フォーラムで京大の山中伸弥教授が講演し、再生医療用に新型万能細胞（iPS細胞）バンクを作る構想を明らかにした。がん化を起こさない製法や作製したiPS細胞の安全性の検証を徹底して行い、5年後をメドに設立することを考えているという。（6.4 10Fホール）

■米ワシントン州エバレット港関係者の会見

シアトルの北に位置するエバレット港は、ボーイング社工場の輸入部品受け入れ港として機能しており、日本では横浜、名古屋、広島などとの直行便が運行されている。日本側関係者や部品メーカーなどとの交流のため来日した港湾局のパン理事、ホフマン理事らが会見した。（6.5 小会議室）

■競馬記者とJRAの懇談

東京競馬記者クラブ、民放競馬記者クラブとJRA役職員の懇談会が行われた。（6.8 レストラン・アラスカ）

■アーミテージ元米国防務副長官講演

NPO法人「US-Japan LINK」（田村玲子理事長）の主催で、来日したりチャード・アーミテージ氏が「オバマ政権下の世界と日米関係」のテーマで講演した。北朝鮮の核放棄の可能性はない、とし、テロ支援国再指定が必要と主張。日本や韓国が攻撃されれば米国は間違いなく報復攻撃する、と米の核抑止力を強調した。氏と関係の深い与謝野馨・財務・金融・経済財政担当相も出席し、英語で特別講演を行った。（6.10 10Fホール）

■「漂流する世界経済―日本経済の活路を考える」

日本ジャーナリスト懇話会（竹田純会長）で、小此木潔・朝日新聞論説副主幹が講演した。経済変動と過去の恐慌の歴史、今後の見通しなどについての解説の後、出席者との議論が行われた。（6.18 大会議室）

■「“政局”風雲急なり」

未来をひらく日本委員会（尾畑雅美代表 <http://www.nihoniinkai.com/>）で、岸井成格・毎日新聞特別編集委員が政局展望について講演した。（6.18 10Fホール）

■東京・愛媛クラブ

首都圏在住の県出身者を中心とした集まりで、定期的に会合を行っている。今回は前早稲田大学総長の奥島孝康・高野連会長（北宇和郡出身）が「高校野球の意義と今日の課題」のテーマで講演し、出席者との意見交換を行った。（6.18 宴会場）

新しいOB会員

こいけ ひろつぐ
▼小池 洋次



1974年日本経済新聞入社。編集委員、ワシントン支局長、国際部長、日経ヨーロッパ社長、論説副委員長などを経て09年4月から関西学院大学教授。

関西では大学、関東では日本記者クラブを拠点にポリシー・ウォッチを続けます。クラブのロケーションはそのためには最適ですね。

■日本-イラク外交関係樹立70周年記念シンポジウム

「新生イラクが中東で果たす新たな役割と、日本とのパートナーシップ」をテーマに、中東調査会（佐々木幹夫会長 <http://www.meij.or.jp/>）と国際交流基金（小倉和夫会長 <http://www.jpff.go.jp/j/>）がシンポジウムを開催した。来日中のズイーバリー・イラク外相も出席した。（6.19 10Fホール）

■牧久さんの出版をお祝いする会

特派員としてベトナム戦争を取材した牧久・日経顧問の『サイゴンの火焰樹―もうひとつのベトナム戦争』（ウェッジ）の出版を記念し、関係者が集まった。（6.22 10Fホール）

■鈴木宗男氏講演

千代田プレスクラブ（今井久夫会長）で、鈴木宗男衆院議員が今後の政局について講演した。（6.23 大会議室）

■ムーディーズ ソブリン格付けプレス説明会

米格付会社ムーディーズ・インベスターズ（日本法人 HP:<http://www.moodys.co.jp/pages/HomePage.aspx>）が、主要国のソブリン格付けについての説明会を開いた。「百年に一度の危機におけるソブリンリスクの格付け」と題したスペシャルコメントを発表、世界同時の急激な景気後退に対し、一斉に格下げすることはない、とした。日本はAa2を維持。今後の評価についてバーン・リージョナル・クレジット・オフィサーは、財政再建の実効性が鍵になるとコメントした。米国は「下方に推移したがトリプルAの範囲内」とAaaを維持したが、政府の債務管理能力への信頼が低下した場合には格下げもあり得る、とした。（6.23 10Fホール）

■日米記者交換計画 懇親会

新聞協会が行う記者交換計画で米国の記者6人が来日した。6/21から7/4の日程で、東京のほか静岡、愛知（豊田市）、京都、大阪を訪れた。（6.24 宴会場）

■細川佳代子さんの本と活動を広める会

細川佳代子さん（細川護熙元首相夫人）が50年にわたるボランティア活動を振り返った著書『花も花なれ 人も人なれ』（角川書店）の出版を記念し、関係者が集まった。（6.26 10Fホール）

■「スタートした裁判員裁判-課題は語り尽くされたか」

マスコミ倫理懇談会全国協議会が、裁判員制度の課題を議論する公開シンポジウムを開催した。作家の佐木隆三氏は基調講演「司法の大転換期への期待と不安」で、裁判員の守秘義務の撤廃を主張した。その後の佐木氏、江川紹子氏、岡慎一弁護士、村井敏邦・龍谷大法科大学院教授、大出良知・東京経済大学教授（司会）によるパネルディスカッションでは、守秘義務のほか裁判員の負担の大きさ、公判前整理手続きや事件報道のあり方について議論した。（6.27 10Fホール）

■在京岐阜県人会

大垣市出身の成松義文・ファンケル社長が講演した。岐阜新聞、岐阜放送が、県ゆかりの企業人、著名人などを招き定期的に開催している（6.29 宴会場）

■放送人政治懇話会

次のようにゲストを招いた。平沼赳夫・元経産相（6.3）、枝野幸男・民主党衆院議員（6.10）、菅原一秀・自民党副幹事長（6.17）、武部勤・元自民党幹事長（6.24）

バー、レストラン、宴会

予約電話 和食3503-2723 洋食3503-2766

吉
富
カクテル

青いバラはスマイルの香り
7月のカクテルは「ブルー・ローズ」。バイオレットリキュールのスマイルの香りと淡い色合いがさわやかな味わいです。

和
食

文月懐石
◆焼き茄子ゼリー寄せ、枝豆真丈磯辺、鰻の葛打清汁仕立て、刺身3点盛り、カマスの利休焼き、鰻しゃぶしゃぶ、丸茄子帆立貝柱餡掛け、もずく雑炊、赤肉メロン (5,250円 8月7日まで)

洋
食

8月は半額サービス 10階アラスカ
日頃のご利用に感謝して、8月3日(月)から31日(月)の間、10階レストラン(夜の部)の一般メニューをすべて半額で提供します(サービス料は別)。シェフのお薦めディナーコース(オードブル2品、スープ、和牛ステーキ、デザート)は通常12,600円が6,300円です。ご家族、友人との会食にご利用ください。(シェフ 黒須修一)

夏の宴会プラン

例年通り、8月の部屋代が半額になります。さらにこの期間に限り割安の宴会プランも設けます。洋食8品、和食(そば)で一人3,000円です。1,500円でフリードリンク(2時間)にもできます。この機会にクラブで暑気払いをどうぞ。期間は8月1日～31日です。

お盆の短縮営業

8月10日(月)～15日(土)の1週間、ラウンジは午後6時まで、貸室は午後5時までとさせていただきます。この間、9階レストラン(和食)はお昼のみの営業になります。なお、10階レストラン(洋食)は平常通り営業します。

●山形新聞からサクランボ

今年も見事な佐藤錦が山形新聞から届きました。いつものようにラウンジで会員みなさんに召しあがっていただきました。少し前に『ハチはなぜ大量死したのか』という本が話題になりました。世界的に起きているミツバチの“失踪”がテーマですが、山形でもミツバチ不足のため、ミツバチを貸し借りしたり人工授粉をしたりと、対応に苦慮しているとか。輝く一粒一粒に改めて感謝。

クラブの電話 ダイヤルイン

和食レストラン(9階)	会員事務
3503-2723	3503-2725
洋食レストラン(10階)	経 理
3503-2766	3503-2728
貸室予約、宴会打ち合わせ	
3503-2724	
受 付	会見申し込みアドレス
3503-2721	kaiken@jnpc.or.jp
クラブ行事への申し込み	ホームページアドレス
3503-2722	http://www.jnpc.or.jp

会報委員会

委員長=住田良能

委 員=小西美和子 近藤憲明 菅谷 齊 富田 恵
羽原清雅 枇杷田裕 堀 徹男 村澤繁夫
八木浩幸

連 絡=長谷川和子 本庄五月

(電 話 03-3503-2752 FAX 03-3503-7271)

ホールご案内

会員社のホールで開催されるコンサートなどの情報を紹介します。

●日経ホール

♪アコースティックLIVE「夏の夜の夢」

8/5 谷山浩子&沢田聖子、8/6 杉田二郎&三浦和人、8/7 桑江知子&平安隆、8/8 庄野真代&“ブレッド&バター”
4夜連続の夢の組み合わせ。(各¥5,250)

問い合わせ: 03-5281-8074

http://www.nikkei-hall.com/

●サントリーホール

ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団の講演に合わせた特別プログラム。

♪ウィーン・フィル首席奏者によるマスタークラス

9/18 講師:タマシュ・ヴァルガ(チェロ)

9/24 講師:フォルクハルト・シュトイデ(ヴァイオリン)

若手演奏家への“公開レッスン”(1,000円)

♪9/20ウィーン・フィル楽団長講演会(室内楽付)

クレメンス・ヘルスベルク楽団長(4,000円)

チケットセンター: 03-3584-9999

<法人代表変更>

報知新聞社 (旧)小松崎和夫

(新)岸 洋人 代表取締役社長

神奈川新聞社 (旧)稲村 隆二

(新)堀田 憲司 代表取締役社長

<訃報>

上野稔会員(個人D・毎日新聞OB、89歳)が5月21日老衰のため、伏見俊之会員(NHK、54歳)が6月20日急性心不全のため死去されました。謹んでお悔やみ申しあげます。

<会員現況>法学会員 142社 基本会員 779人

個人会員 1,545人 法人・個人賛助会員 68社 172人

特別賛助会員 81人 名誉・功労会員 9人

計 210社 2,586人

HP <http://www.jnpc.or.jp/>

「会見速記録」: 6月の新規掲載

●辻井喬氏 総会記念講演「21世紀における日本文化」(2009. 5. 29) ●西崎文子成蹊大学教授「オバマの『核のない世界』演説を読む～未来志向の歴史感覚」(2009. 6. 15)

今後の行事予定 (7/3現在)

7. 15 (水) 15:00～16:30 (10階ホール)
ユーラシア研究会⑦「アフガニスタン」
孫崎享 元防衛大学教授
7. 17 (金) 15:00～16:30 (10階ホール)
研究会「世論調査」③
西平重喜 文科省統計数理研究所名誉所員
7. 28 (火) 12:00～14:00 (10階ホール)
ライス 在日米軍司令官 昼食会

行事案内専用電話 03-3503-3764

日時の変更なども含め、最新のクラブ行事をテーブルでお知らせしています。

写真回廊

撮影 松崎 浩一（まつざき・こういち 東京新聞写真部）



5.18 参院本会議場

天井桟敷の若者たち

大きなマスクに隠れてよく見えないが、だれもかれも懸命に不安をこらえている。5月18日、国会は入館者にマスク着用を要請した。その日、マスクをつけて参院本会議場を見学する修学旅行の中学生たち。昔、「天井桟敷の人々」というフランス映画があった。この映画で天井桟敷をバラディ（天国）と呼ぶことを知った。最上階の、天国に最も近い（言い換えれば最も安い）席だからというしやれである。

国会の天井桟敷の中学生たちは天国どころではない。新型インフルエンザが日本に上陸した。無事に帰りつけるだろうか。目を閉じて考え込む子もいる。

新型車、新型ゲーム機、新型ケータイ——新型はすばらしいという日本人の新型信仰に冷水を浴びせたのが新型インフルエンザだった。

新型は新型でも、とげとげのついた不気味なウイルス。今回は弱毒性で助かったが、次に来る新型は果たしてどうなるか。

人間にとって、未来は新型インフルエンザに似ている。

時の進行とともに、現在は刻々過去に繰り込まれ、ベールをかぶった未来がぼんやり顔をのぞかせる。新型未来。この未来は天国的か、弱毒性か、それとも強毒性か。そっと観察しよう。もちろん、忘れずにマスクをつけて。

（諏訪 正人）

第19期(2009年度)委員会(◎委員長 役職は7月1日現在)

総務委員会

◎朝比奈 豊	毎日新聞社代表取締役社長
船橋 洋一	朝日新聞社主筆
朝倉 敏夫	読売新聞グループ本社副主筆、東京本社取締役副社長・論説担当
住田 良能	産経新聞社代表取締役社長
伊藤 修一	共同通信社常務理事・編集局長
神谷 哲史	TBSテレビ報道局長
久保伸太郎	日本テレビ放送網取締役相談役執行役員
小櫃真佐己	フジテレビジョン常務取締役
渡辺興二郎	テレビ朝日取締役報道局長
鳥居 元吉	日本新聞協会専務理事
玉川 寿夫	日本民間放送連盟専務理事
斎藤 史郎	理事長 日本経済新聞社専務取締役電波・電子戦略・日経ヴェリタス・経理・教育事業本部担当
宇治 敏彦	副理事長 中日新聞社相談役・論説担当
今井 環	副理事長 日本放送協会理事・放送総局副総局長
岩崎 玄道	専務理事

会員資格委員会

◎朝倉 敏夫 理事

企画委員会

森 純一	朝日新聞社ゼネラルマネジャー補佐
布施 広	毎日新聞社論説副委員長
松田 陽三	読売新聞社編集局次長
金子 豊	日本経済新聞社東京本社編集局次長
近藤 順夫	共同通信社編集局次長
坂本 忠宣	日本放送協会報道局編集主幹・取材センター長
齋藤 雅俊	TBSテレビ報道局編集主幹
大沼 裕之	日本テレビ放送網報道局総務
若松 誠	フジテレビジョン報道局解説委員長
川嶋 明	日本新聞協会事務局次長
工藤俊一郎	日本民間放送連盟常務理事・事務局次長
◎船橋 洋一	理事
宮田 謙一	朝日新聞社論説副主幹
小此木 潔	朝日新聞社論説副主幹
坂東 賢治	毎日新聞社外信部長
倉重 篤郎	毎日新聞社論説副委員長
橋本 五郎	読売新聞社特別編集委員
浜本 良一	読売新聞社論説委員
原田 亮介	日本経済新聞社東京本社編集局次長
脇 祐三	日本経済新聞社論説副委員長兼編集委員

会報委員会

◎住田 良能 理事

施設運営委員会

玉利 伸吾	日本経済新聞社東京本社編集局次長兼夕刊編集長
高畑 昭男	産経新聞社特別記者・論説副委員長兼編集委員
鶴田東洋彦	産経新聞社東京編集局編集長
宮田 一雄	産経新聞社特別記者・編集委員兼論説委員
会田 弘継	共同通信社編集委員室次長
田崎 史郎	時事通信社解説委員長
菅沼 堅吾	中日新聞社東京本社編集局次長
長谷川幸洋	中日新聞社東京本社論説室論説委員
影山日出夫	日本放送協会解説委員
山崎 登	室解説副委員長
川戸 恵子	日本放送協会解説委員室解説副委員長
井田 由美	TBSテレビシニアコメントーター
和田 圭	日本テレビ放送網報道局解説委員(兼)キャスター担当部長
川村 晃司	フジテレビジョン報道局解説委員
広瀬 和彦	テレビ朝日報道局報道企画部コメントーター
石郷岡 建	テレビ東京報道局次長
泉 宏	兼経済ニュースセンター長
瀬川 至朗	(毎日新聞出身)
園田 矢	(時事通信出身)
◎渡辺興二郎	理事
高橋 淳	日本経済新聞社総務局次長
畑野 祐一	日本放送協会報道局総務部長
広江 潤	日本テレビ放送網報道局総務
柏木 佳二	テレビ朝日報道局報道専任局次長
國府 一郎	日本新聞協会事務局次長兼総務部長
佐藤 敏実	日本プレスセンター常勤監査役
阿部 穆	(産経新聞出身)
塚田 博康	(東京新聞出身)
近藤 憲明	(毎日新聞出身)
菅谷 齊	(共同通信出身)
羽原 清雅	(朝日新聞出身)
堀 徹男	(NHK出身)
村澤 繁夫	日本民間放送連盟理事待遇・事務局次長兼研究所長
富田 恵	日本新聞協会編集制作部長(編集、国際担当)
小西美和子	兼出版広報部長
◎住田 良能	理事
枇杷田 裕	共同通信社内政部長
八木 浩幸	新潟日報社東京支社報道部長兼論説委員
小西美和子	テレビ朝日報道局ニュース情報センター社会担当部長